

# 校長先生の初恋物語

## 第55話 アマーラさんのスピーチ

とっくんと、ちん君と、コージ君は、みんなに内緒にしていることがありました。それは、今日、アマーラさんが再びこのクラスにやってくるということ。学年が上がって、6年2組になったぼくたちのところに、もうすぐアマーラさんがやってくるということ。



朝の会の時間になりました。よろひげ先生がやってきました。そしてその後ろから、にこにこ笑ったアマーラさんがやってきました。アマーラさんが見えたそのしゅんかん、クラスみんなは大きき。

「えーっ。どうしてーっ。やったーっ。」の大合唱です。手をたたいて喜んでいる人あり、ぽかーんと空いた口をおさえている人あり、とにかくみんな大喜びでした。

自己紹介の必要なってありません。もうみんな分かっています。アマーラさんが、どんなにすばらしい人か、みんな知っています。特に、イノシシから助けもらったきんに君は、アマーラさんのことが大好きになっていましたから、泣いて喜んでいました。ほっといたら、アマーラさんに抱きついて、キスでもしてしまいそうでした。



自己紹介はありませんが、アマーラさんはみんなの前で、話を始めました。

「このクラスみんなに会いたくて、またお父さんについてきちゃいました。みんなに会えて、本当にうれしいです。わ



たしは、5年生の時は、このマンモス小に逃げたような感じでした。知っている人もいないかもしれないけど、わたしはむしりされて、苦しんでいました。そんなわたしを見て、お父さんがマンモス町に一緒に行ってみようと言ってくれたんです。わたしは、このクラスのみんながいたから、自信ができました。」

みんな静まりかえって聞いていました。「わたしを最初に助けてくれたのは、ミッタの仲間です。ずっと秘密にしてきましたが、ちん君、コージ君、とっくんとわたしで、ミッタという秘密組織をつくって、その3人が、わたしを助けてくれました。ミッタがなかったら、わたしはみなさんとなかよくできませんでした。ミッタの仲間には、

ありがとうございます。」もう、とっくんは、泣きそうでした。コージ君なんか、すでに泣いています。



「でも、この春休みに、このミッタの仲間とあって知りました。今は、とっくんもつらいめにあっていて。今度は、わたしがとっくんを助ける番だと思いました。みなさん、とっくんをきらうのをやめてください。お願いします。」

そのスピーチに、最初に泣いたのはコージ君。そしてとっくん。やがて、よしこさんも、ダンプさんも、きんに君も、足長君も、ちん君も、他にもいろんな子が泣き出してしまいました。

そして、足長君が立ち上がり、とっくんのところに、向かってきました。

次回予告 ミッタ解散そして新しいミッタ